

日本建築学会

「民家再生のネットワーク」  
インタビュー 降幡廣信

journal of  
architecture  
and building  
science

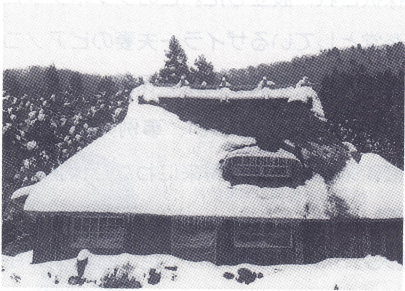


## 茅葺きがグローバルになれば

フリーライター  
佐伯マギー



さいきまぎー  
1983年米国イリノイ州生まれ  
／東京でのライター活動（デザイン、ビジネス、地場産業、民家関連記事を雑誌・新聞に発表）を経て、京都府美山町に9年間在住。今後は米国で手作りのハウジング（茅葺き含む）の取材を予定



筆者の自宅。美山茅葺き研究会の異文化技術交流計画で屋根の葺替えを実施することにした。薪ストーブの煙を屋根裏に上げているため、雪は棟の下が最初に融け、室内の暖気が届く窓の上が次に融ける。（2000年2月）

### 美山茅葺き研究会

現在、日本の茅葺屋根は危機に瀕している。社会構造の変化により従来の屋根を維持してきたシステム（ゆい）が壊れた結果、家主の金銭的な負担が大きくなり、葺替えが非常に困難な状況にある。その一方で、茅葺屋根の家をエコロジカルなものとして見直す動きが出ている。数年前から多くの茅葺職人や研究者がヨーロッパの茅葺屋根技術の合理化を調査していたが、日本の屋根構造や気候に適しているかは定かでない。そこで、美山茅葺き研究会が我が家（築100年）を実験台として、異文化技術交流計画を実施することになった（以下、プロジェクトと表記）。

はイギリスと日本の共通の素材であるヨシを使用することになる。「Crooking」で使用できるヨシの長さは160cmまでで、円錐形になるものでなければならない。温暖な日本ではヨシの成長が早く、背丈の低いものを入手するのは極めて困難であるが、幸い宮城県北上川の河口付近のヨシ（熊谷産業）に該当するものがあつた。

10月2日に（財）ハウジングアンドコミュニティ財団の助成事業として、全国の茅葺職人のため「日英茅葺き技術交流会」というワークショップを実施した。参加者は職人24名、アドバイザー3名、文化庁調査官1名、関係者8名。翌10月3日には全国茅葺き民家保存活用ネットワークが「第一茅葺きフォーラム：21世紀の茅葺き技術を考えるー英国の茅葺き事情から」を行い、エバンズ氏、尾坂氏、そして筆者が講演した。ワークショップの参加者および茅葺きに興味を持つ人々のため“The Thatchers’ craft”（イギリスの茅葺職人のバイブルと言われている）の一部日本語訳を資料本として作成した（情報量が多く分かりやすい写真・解説付き。京都市国際交流協会のボランティアによる英和訳）。また、全工程を正確に理解してもらうため17分のビデオ（助成金：大和日英基金。解説：研究会の塩沢実氏、英語版は制作中）を作成し、交流会に参加した茅葺職人に配付および希望者に販売する予定である。

マスメディアは、日本経済新聞、産業経済新聞、京都新聞、Japan Times、毎日放送（ズーム・イン朝）、読売テレビ、テレビ東京（ドキュメンタリー人間劇場）が紹介した。また、筆者と筆者の夫（佐伯弘）が書いた記事は『チルチンびと』、朝日新聞刊 Japan Quarterly に掲載。研究資料としては、（財）日本ナショナルトラスト、（財）文化財建造物保存技術協会、日本民家再生リサイクル協会情報紙『民家』、『INAXブックレット』に紹介された。

### 新しい茅葺きを模索する

私たちが住む美山町では、茅葺きは補助金で支えられている。茅葺きの技術保持者には毎年一定額（10万円）が支給され、重要伝統的建造物群保存地区であるか否かにかかわらず全戸が葺替えの際には補助金の対象となるし、職業としても茅葺きが比較的安全かつ安定したものとして成立している。

しかし日本の他の地域では、かつて茅葺きが欠かせない一部だった社会循環システムの衰退により、茅葺民家の所有者が多くなる財政的負担を強いられているのが現状である。

3年前、私も出席した第1回茅葺き技術家会議の開催により、屋根技術保存協会は偉大な一歩を刻んだ。ここで初めて、文化財ではない茅葺民家が議題となった。第2回同会議では、ちょうど完了間近だった私たちのプロジェクトが尾坂氏によって紹介された。文化財としての伝統的技法、地域性をこのプロジェクトでは除外し、民家の要素としての屋根の寿命、合理性、経済性、に焦点を合わせイギリスの技術を導入。職人を含めて、多くの人々に創造的な考察を促したことで、プロジェクトはその目的を果たしたと言える。今後の茅葺屋根の存続は、職人と家主の考え次第である。

美術家である私の夫は、愛媛県川内町の惣河内神社の長男として、茅葺きの社務所（築200年以上）で生まれ育つた。夫は自然素材を使って創作活動をしており、美術は日常のなかに存在し、しかも将来の指針になるものであるべきだと考えている。言い換えれば、日常生活そのものである美しい茅葺民家が将来に生きるため模索することは、美術家の仕事ということになる。

一方、私はアメリカ出身のフリーライターで、子供時代には農村から農村へと移り住んだ経験がある。両親は2人ともデザイナーで、モノ作りをしていた。1987年に私

1999年9月11日～11月21日の間、イギリスの茅葺職人ロジャー・エバンズ氏、アシスタントとして茅葺職人・尾坂勝氏が「Crooking」という技法で葺き替えた。美山の技術では50年前のイギリスと同様、縄で縫うことが基本であり、屋根の裏側に手伝いが一人必要となる。「Crooking」は金鎚で鉄のフックを打ち、鉄の押しボコでヨシを固定する技法である。そのため、職人1人で作業ができる。美山町ではススキを使用しているが、このプロジェクトで



足場よりも、早く簡単に作業が出来る梯子を使う。屋根の棟樑は「Sway」という3mmの鉄棒。



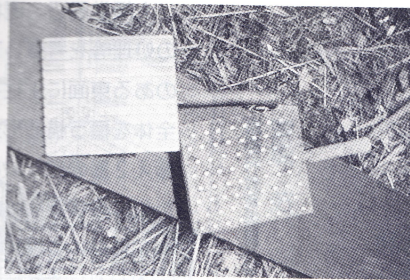
は川崎の日本民家園で初めて茅葺きと出会い、すっかり魅せられてしまった。1991年に地元の若い茅葺職人と出会ってからは、茅葺職人たちの取材を続け、見守ってきた。そして、茅葺屋根が危機的状況にあると実感し、2カ国語を使える利点を役に立てたいと考えるようになった。

## グローバルな茅葺き

プロジェクトの進行中、茅葺きや茅葺き研究の範囲をさらに広げようとしている世界各地の人々と連絡をとった。茅という言葉は住宅やその他建造物を覆う植物素材の総称であるから、そこには人間が頭上を覆うために使うあらゆる植物素材が含まれる。茅は万国共通でありながら、局地的でもあり、地域ごとに定義されるものでもある。

しかし、人々が国境を越え自由に行き来しているこの時代、茅葺きは世界中で研究され、実践される可能性を秘めている。1998年に私の父が亡くなったため、私たち一家は2000年夏にアメリカに戻る決意をした。この機会にアメリカの茅葺き事情やその世界的な可能性について調べるつもりである。アメリカには元の姿を留める茅葺きは現存していないが、茅葺運動が盛んになってきている。アメリカ東海岸には、年間2百万束の収量が得られるほどの広大な茅場があり、3年前からメイン州では年間5,000束程度の刈り入れが行われている。また、他の伝統建築技術のワークショップと共同で茅葺きや茅刈りのワークショップも開かれるようになってきている。

茅葺きの特色について地域単位できちんとした調査が地球規模で行われれば、茅のグローバル化を図ることができる。つまり、共通点や地域差が見出せれば、今は伝統的建造物と深く結びついている茅も、エコロジカルでモダンな国際的屋根素材として使うことができるようになる。さらにインターネットを使えば、茅葺きに関する「地元」情報はインターネットで各地に発信することができる。進行中の「国際」茅葺プロジェクトはインターネット上で解説するこ



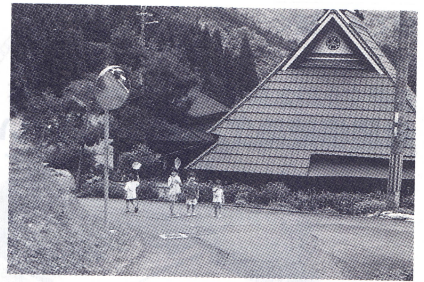
「レゲット」というイギリス職人の道具。金属のレゲットは屋根を葺くとき、木のレゲットは仕上げに使う。

的に認識した人はその後これを否定することは決してない。

## 日本の茅葺きの可能性

イギリスで茅葺きについて取材した結果、私は、過去の教訓に基づきながらも将来のビジョンを上手に組み入れることで、日本の茅葺きも生き残ることができるという結論に辿り着いた。

1790年から1940年までの間、イギリスで茅葺きに使われた代表的な素材は小麦であった。品種改良により、藁の丈は平均120 cm から 80 cm へと短くなった。短くなった茎と大き目の穂はシリアル生産者には好都合だったが、茅葺職人にとっては反対だった。手法や職人が同じでも材料が短くなったことで、屋根の寿命が縮み、よって茅葺きへの一般的評判が激しく低下したのである。一方で、ピクチャレスク運動やアーツ・アンド・クラフツ運動(1870~1900)に参加していた建築家たちによって、茅葺きの価値が再発見された。新建築の「洗練された」ブルジョワの茅葺きが人気を博し、必然的に、藁に比べ輸送、設計、適用が容易で清潔な(安価ではなかったが)ヨシの使用が圧倒的となった。その結果、茅葺きは事実上その農業背景から切り離されるようになったが、新しい茅葺建築はその可能性を探り、生き生きとした創造的なものとなった。しかし、残念ながら現在は自動「登録」され、地方当局の「合意」を要するイギリスの茅葺きは、歴史的観点からのみ考えられるようになってきている。ごく最近、古代植物学研究によって麦藁の古代品種の種が発見され、伝統回復への動きが



「トタンに感謝」美山町の民家。トタンの下には茅葺きがそのまま残されている。手前は、筆者の子供と友人。

強制ではなく、したがって個々の茅葺民家の運命はその所有者の手に委ねられている。所有者がどういった人物なのか、どういう考え方の持ち主なのか最も重要なのである。茅葺きに強く魅せられた都会のエリートたちは茅葺民家を購入し、改築する。しかし、この人々の手が届く前に、地方では茅葺民家が守られないまま寿命を終えようとしている。地方の人々が古い茅葺民家を貸したり売りたいがらないということは、日本の茅葺きを守るために、新建築を合法化し奨励することが重要だということを意味している。

「トタンに感謝。」近代化の波が押し寄せた結果、茅葺きは貴重な休息の時間を得ることができた。茅葺屋根にトタンを被せることで(それだけでも特殊技術と言えるが)、日本では推定約20万戸の茅葺民家が救われたのである。また、数少なくなった年配の茅葺職人に若い後継者ができたことも幸いである。エコ・ハウジング、グリーン・ツーリズム、民家再生、グローバル化という動きの中で、日本の茅葺きにはイギリスの茅葺きに比べると、過去の教訓を守りながらも古いイメージからの脱却を図る余地がまだまだ残されている。

たとえば、茅葺きを持つ別の側面を考えてみることもできる。つまり、茅葺屋根は肥料として腐らせることにより、農業中心の生活サイクルの一端を担っていた(筑波大学・安藤邦廣氏説)が、その極端な方向で「全く仮の屋根」という葺き方があっても良い。そうすることで茅葺きの持つエコロジカルな面をより一層展開することができる



とができる。

私は、茅葺きほどその信奉者を惹きつける魅力をもったものに出会ったことがない。茅葺きファンは一風変わっており、執り着かれていますとも言える。私が信ずるにこれは本能である。というのも、茅葺民家は、容れ物というよりは生活圏であり、建物というよりは巣である。一度このことを本能

より活発化してきている。ヨシはいずれこの古代品種に取って代わられるようになるだろう。法的障壁も取り除かれ、自由にデザインができるはずであるが、外見的には歴史的建造物に見える建物が多く存在しているように感じられた。

日本の茅葺きはまだ上記のような歴史的・法的規制を受けていない。登録制度は

今後日本では21世紀に適した茅葺きの建物が設計され、建てられるようになるだろう。日本の新建築の茅葺民家は、より健全な社会・建築環境作りを目指す社会運動を補う形で、世界の茅葺きに影響を及ぼすようなエコロジカルな存在ともなり得るだろう。

(翻訳協力・島田明子)